

■ロボットは東大に入れるか

アメリカの apple 社が iPad を発表してからわずか 10 年足らずでタッチパネルなどの電子機器が爆発的に普及し、今や 3 才の子どもでさえもタッチパネルを操作する世の中になりました。10 年前の私たちは、教育現場にこのような電子機器が持ち込まれる風景を想像したでしょうか。想像を絶するスピードで進む世の中に、乗り遅れてはいないでしょうか。

今回は、「ロボットは東大に入れるのか」という話から始めたいと思います。国立情報学研究所の新井紀子教授が AI（人工知能）を東京大学に合格させるプロジ



ェクトを 2011 年から取り組んでおられます。このプロジェクトの目的は「AI には何ができ、どこまで任せられるのか」というテーマに迫ることであり、言い換えれば「人間は何をすべきか」、AI 技術の進歩で人間の未来がどうなるかを社会問題として提起したかったのです。

この研究を通して、AI は物事の意味を理解し、思考し、表現することが困難であるという課題が明らかになりました。具体的には、介護や子育て、教育は AI にとって難しいということです。裏を返すと、「人間は何をすべきか」という問題の解答に辿り着きます。この AI が持つ課題は、これからの子どもたちに必要な力を示唆してくれているように思います。

「AIは何ができるのか」
「どこまで任せられるのか」

「人間は何をすべきか」

新井教授も言われるように、次代を担う子どもたちが AI を使う側か、使われる側になるかは教育にかかってきます。AI は暗記と手順通りの作業を最も得意としており、これまでの様な早く正確に辿り着く力や、暗記力を重視する教育では、AI に取って代わられる人間になってしまうのです。ここに、これからの教育についてのヒントが隠されているのではないのでしょうか。

■「何を学んだか」から「どのように学んだか」への転換

これからの教育について示された次期学習指導要領の改訂案が、2 月 14 日に公開されました。今回の改訂のポイントは、学習内容だけでなく、「どのように学んだか」という学習方法にまで踏み込んで示唆している点にあります。教員は、これからの子どもたちがどのように社会と関わってより良い人生を送るのかを想定し、子どもたちの生き方にも影響するような授業づくりを心掛けてください。教員は教えるだけの存在ではなく、協働探究の同伴者であり、探究的活動のファシリテーターであり、学習のコーディネーターとしての資質が求められているのではないのでしょうか。

しかし、次期学習指導要領が示している方向性について教員自身が腑に落ちていなければ授業を変えることは難しいでしょう。その為には、学校全体で教員の意識改革を行うことが大切です。意識改革をする最も有効な手段は、非常にベーシックな方法ですが、やはり授業研究ではないでしょうか。授業研究は日本の教育の強みと言われ、世界からも注目されています。授業研究によって地道に授業改革を進めていかなければ、次代に活躍する子どもを育てていくのは困難だろうと思います。

■授業研究と教員個別訪問研修

「教員も変わらなければならない」と言う大変なことに聞こえるかもしれませんが。私自身、元は中学校教員でしたが、この職に就いてから機会がある毎に様々な授業を見させていただきました。小学校は授業研究がよく行われていて、子どもの目線に立ったきめ細やかな指導が強みだと感じました。中学校では発達段階に応じた、小中一貫教育の取組の良さを活かし、学校の種類

に捉われない開かれた授業を互いに見て研究すべきだと思います。

奈良市では、一方的に研修を受けてもらうだけでなく我々から出向こうということで、平成 27 年度より教員個別訪問研修を実施しています。教員の授業をビデオ撮影し、振り返りを行っています。現場からも支持をいただき、手応えを感じている取組です。この取組を通して、しっかりと授業研究を積み重ねていただくとともに、小学校で大切にしているものは中学校にも引き継ぎ、中学校でのノウハウを小学校にも取り込んでいただきたいと思います。この研修は 20 代 30 代の教員が半数を占める今だからこそすべきことだと考えています。この研修の最終目標は、校長がリーダーシップをとり、先輩教員が若手教員を育てる校内研修の在り方を確立することです。そして、1つの学校の中だけという閉ざされた環境だけで行われるのではなく、多くの人にも開かれる研修であってほしいと思います。

■おわりに

1年前にもお話ししましたが、知識の伝達のみでの授業で力を付けた子どもは、いずれ AI に追い抜かれていきます。わずか 10 年足らずで劇的に生活環境が変わっていく世の中に生きていることを認識していただきたいと思います。日本の強みである授業研究を活用してどれだけ質の高い教育が行えるか、それが求められます。その為には、どんな子どもたちを育てたいのかなどについて、教員一人一人が腑に落ちるまで議論していただきますよう宜しくお願いします。

教科の特質に応じた**深い学び**
と
「**授業研究**」を通じた**授業改善**

授業研究のテーマ：
「**主体的な学び**」 「**対話的な学び**」 「**深い学び**」
であるか。